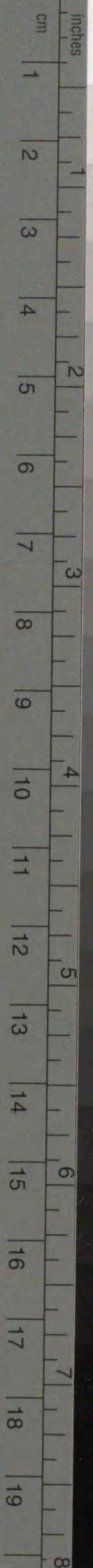


Kodak Gray Scale



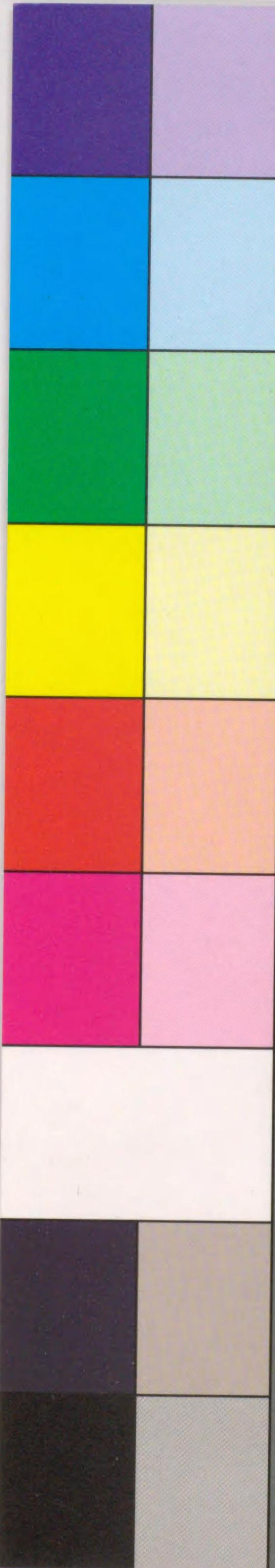
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



579
10

579-410



1200501521610

飼料栽培成績要報

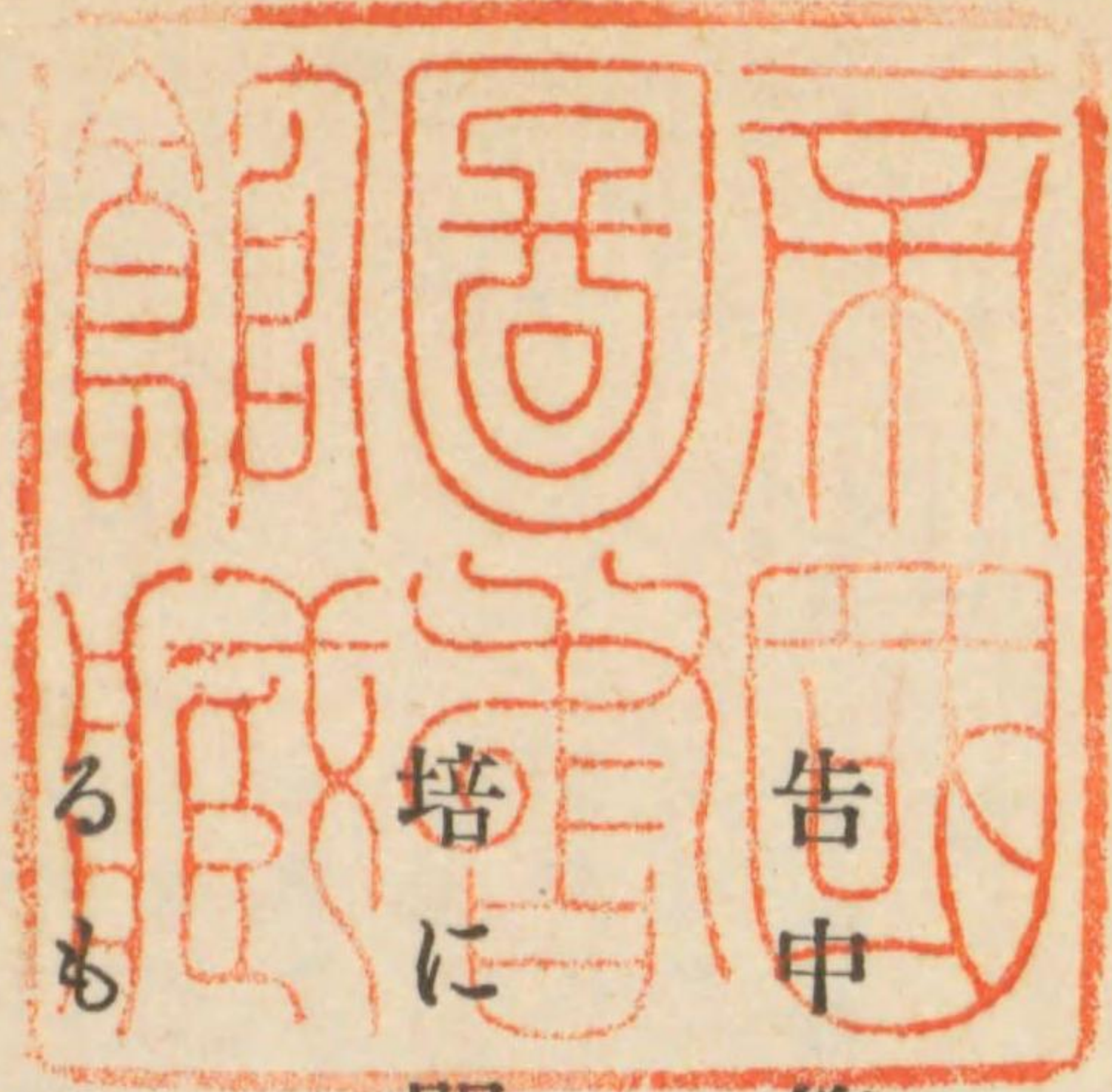
579 410

昭和四年七月

飼料栽培成績要報

畜産試験場

579-410



本報は主として當場に於ける毎年度事業報

告中第一部耕作掛の報告に係る飼料作物栽

培に關する試験研究成績の要領を輯録した

るものなり

昭和四年七月

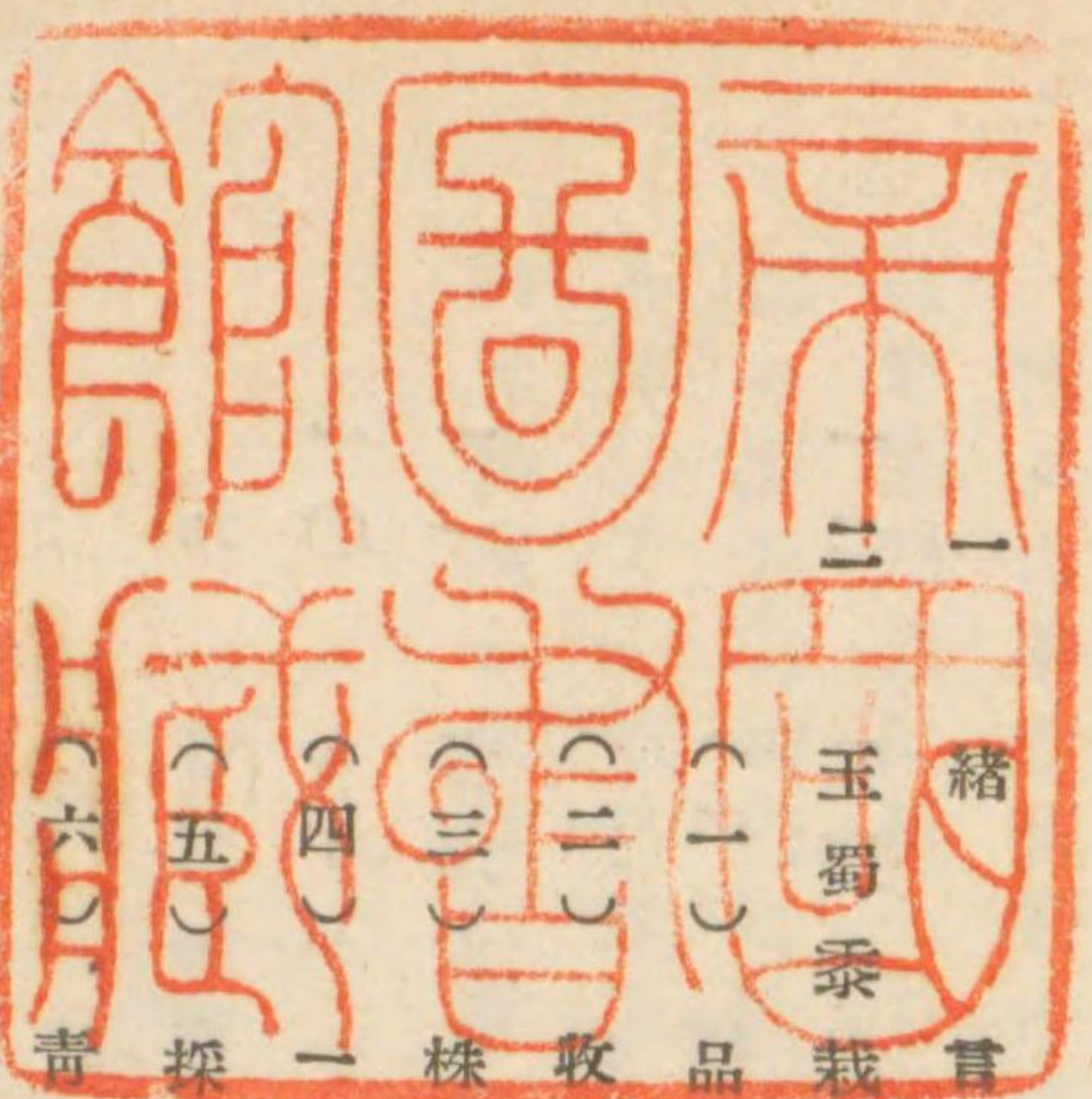
發行所寄贈本



農林省畜産試験場

飼料栽培成績要報

目次



緒言
一 玉蜀黍栽培に関する試験
二 品種比較
三 收實用玉蜀黍に對する肥料配合比較
四 株間の收實量に及ぼす影響
五 一株の本數の收實量に及ぼす影響
六 採種に就て
七 青刈用玉蜀黍の播種量に就て

三 燕麥品種比較

四 パールミレットの播種量に就て

五 牧草播種期の生草收量に及ぼす影響

六 甘藷の栽培に関する試験

(一) 肥料に就て

(二) 挿苗法に就て

飼料栽培成績要報

飼料栽培成績要報

七 家畜用ビートの栽培に就て

- (一) 播種期
- (二) 品種比較

八 野草草立に關する研究

- (一) 無肥料野草地の刈取時期と翌年収量との關係
- (二) 施肥野草地の刈取時期と翌年収量との關係
- (三) 要約

九 青刈用燕麥並ザイトウキツケンの混播量に就て

一〇 ルーサン栽培試験

一一 青刈大豆の栽培に就て

- (一) 畦幅と収量との關係
- (二) 播種量に就て

一二 當場に於ける飼料作物栽培表

一 緒 言

飼料作物栽培に關する試験研究は家畜の飼養並改良上重要な關係を有するものにして既に政府が種牛牧場を設置してより種牛牧場種畜牧場及畜産試験場各支場等に於て各種の栽培に關する試験

を施行せり例へば各種飼料作物の栽培施肥等に關する諸種の試験及原野の改良又は火入に關する試験の如き何れも成果の看るべきものありたり

當場に於ても設置以來場内栽培の作物に就ては毎年栽培に關する各種の試験を施行し以て年々場内作物栽培の進歩改良を圖りつゝあり

惟ふに耕種栽培に關する試験は特殊的若くは地方的意味を以て施行せらるゝこと多く從て其の成績の應用性に至つても亦地方的たるを免れざるもの多し當場に於ける飼料作物栽培に關する試験亦然り即ち當場内に於ける栽培上の改良をなさんが爲にのみ施行したるものなるを以て其の成績は直ちに以て一般に應用すること寧ろ不適當なる場合なきにあらず然りと雖地方に於ける飼料作物の栽培上参考となるべきもの尠からざるべきを以て茲に其の概要を記すこととせり

二 玉蜀黍栽培に關する試験

(一) 品種比較

耕種梗概

播種期 四月下旬

栽培距離 畦中三尺 株間二尺五寸 一株本數二本

收穫期 各品種の特性に従つて適期にす

反當肥料 堆肥五百貫 過磷酸石灰十貫 大豆粕五貫

飼料栽培成績要報

飼料栽培成績要報

元肥

施肥法 一區十坪
 供試品種 ホワイトデント、エローデント、阿蘇在來種、ロングフエロー

成績

反當收量

一穂より脱粒したる子實重量(平均)

品名	反當收量	一穂より脱粒したる子實重量(平均)
ホワイトデント	一二六、〇二五	六四、九
エローデント	九五、五一五	四二、八
阿蘇在來種	六六、六〇〇	二二、四
ロングフエロー	五六、七〇〇	二一、五

(三) 收實用玉蜀黍に對する肥料配合比較

耕種梗概

播種期	四月下旬
栽培距離	畦巾三尺 株間二尺五寸
一本株數	一本立
收穫期	十月下旬
肥料	(反當用量單位貫)

第一區

第二區

第三區

第四區

堆肥	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
過磷酸石灰	一	一	三	五
大豆粕	一	一	三	五
元肥				
一區三坪				
一區三坪				
ホワイトデント				

成績

二ヶ年平均反當收量

區別	二ヶ年平均反當收量
第一區	二、六三
第二區	二、九二
第三區	二、九三
第四區	三、一五

(三) 株間の收實量に及ぼす影響

耕種梗概

播種期	五月上旬
畦巾	三尺
一本株數	一本
飼料栽培成績要報	

飼料栽培成績要報

收穫期	十月下旬
反當肥料	堆肥三百貫 大豆粕七貫 過磷酸石灰五貫
施肥法	元肥
面積	一區十五坪
供試品種	ホワイトデント
成績	續(反當收重單位石)
株間	大正十二年 大正十三年 大正十四年 平均
一尺五寸	1 四、二八 一、二八 二、七八
二尺	二、四二 三、六八 二、〇八 二、七三
二尺五寸	二、二二 三、四四 二、一〇 二、五九
三尺	二、〇〇 二、八〇 一、九〇 二、二二
三尺五寸	一、三二 二、五四 一、四四 一、七七

右の成績によれば一尺五寸區及び二尺區多收にして株間大なるに従つて減收の傾向を見るも穂の形状等に於ては株間大なるもの良好なり

(四) 一株の本数の收實量に及ぼす影響

耕種梗概	五月下旬
播種期	同上

栽培距離	畦巾三尺 株間二尺五寸
收穫期	十月下旬
反當肥料	堆肥四百貫 大豆粕十貫 過磷酸石灰七貫
施肥法	元肥
面積	一區十五坪
供試品種	ホワイトデント
成績	續(反當收量單位石)
本數	大正十三年 大正十四年 平均
一本立	一、八〇 二、一四 一、九七
二本立	二、三四 二、八〇 二、五七

右の成績によれば二本立區多收なれども穂の結實歩合及び形状等に於ては一本立區概して良好なり而して更に同様なる試験を繼續し一本立より五本立まで五區を設けホワイトデントコーン及びエロイデントコーンの二品種を以て試験したるに兩品種共本數を増すに従つて收量も増加し五本立區最も收量多かりしも一穂の結實歩合は本數の増加に従つて不良となる傾向を示せり

(五) 採種に就て

玉蜀黍の採種に當り一穂の如何なる部分の子實が良好なる結實を收むるやを比較せり即ち供試品種をホワイトデントコーンとし其の一穂を下部、中間部、先端部に分ち一株二本立となして試験

したる成績概要左の如し

子實收取區別	反當子實收量	收穫當時の反當稈量
下部	六五、〇〇〇	三八〇、〇〇〇
中間部	六五、〇〇〇	四二五、〇〇〇
先端部	四六、五〇〇	四七五、〇〇〇

右成績によれば下部採種區及び中間部採種區の收量は等量にして生育状況も殆んど相似たり

(六) 青刈用玉蜀黍の播種量に就て

耕種梗概	播種期	刈取期	反當肥料	施肥法	面積	供試品種	成績	反當播種量
	五月上旬	七月下旬	堆肥三百貫 大豆粕三貫 過磷酸石灰五貫	元肥	一區十坪	ホワイトデントコーン	一二一八、四〇〇	三升
	畦巾二尺五寸 條播						一二二〇、六〇〇	四升
							一〇六四、一〇〇	五升
							一〇九五、一〇〇	六升
							一一六六、九〇〇	七升
							一〇六六、五〇〇	八升

三 燕麥品種比較

收實用として當場圃場に適する品種につき比較したるにリゴー種は收量最も多く品質亦優良なるを示せり(昭和三年度成績反當換算收量一一貫)

三	升	一二一八、四〇〇
四	升	一二二〇、六〇〇
五	升	一〇六四、一〇〇
六	升	一〇九五、一〇〇
七	升	一一六六、九〇〇
八	升	一〇六六、五〇〇

四 パールミレットの播種量に就て

青刈用として適當なる播種量知らんが爲反當播種量五合區、六合區、七合區、八合區、九合區、一升區、一升一合區、及び一升二合區の八區を設け試験したる結果二ヶ年の平均成績によれば七合區の反當收量一一九〇、〇〇〇にて最良を示せり

五 牧草播種期の生草收量に及ぼす影響

耕種梗概

播種期 四月九日 四月二十三日 五月七日
 栽培距離 畦巾二尺五寸 條播
 刈取期 一番刈八月八日 二番刈十月一日
 反當肥料 堆肥四百五十貫 過磷酸石灰六貫 硫酸アンモニア二貫
 施肥法 元肥
 面積 一區十坪
 供試作物 一區十坪
 續(反當收量單位貫)
 バールミレット、スーダングラツス、テオシント

青刈用作物名	四月九日播			四月二十三日播			五月七日播		
	一番刈	二番刈	計	一番刈	二番刈	計	一番刈	二番刈	計
バールミレット	二元一	一、二五	四八三	五七三	三三六	九〇九	一、〇四七	四三三	一、四八二
スーダン、グラツス	三三三	七六八	一一〇一	三三四	六七八	一、〇二二	五八五	八六二	一、四四七
テオシント	四三三	一、三九	一、七六	六四〇、五	一、一九	一、八四、五	五三九、五	一、六六	二、二七、五

右の成績によれば三種共五月上旬播種のもの生育状況良好なり而してテオシントは收量品質共に最も優良なりき

六 甘藷の栽培に関する試験

(一) 肥料に就て

甘藷の生育並に收量に對し磷酸質肥料としては米糠が最も有効なるを認めたり

(二) 挿苗法に就て

移植の方法と收量との關係を明かにせんとして四十日種を以て直立植、斜植、釣針植、普通植の四區となし試験したるに釣針植最も收量多き成績を示せり

七 家畜用ビートの栽培に就て

(一) 播種期

耕種梗概

播種期 四月中旬 同下旬 五月上旬 同中旬
 栽培距離 畦巾二尺 株間一尺
 收穫期 十月下旬
 反當肥料 堆肥四百貫 過磷酸石灰七貫 大豆粕五貫
 飼料栽培成績要報

飼料栽培成績要報

施肥法 元肥

面積 一區六坪

供試品種 赤長種 黄太種

成績 (反當收量單位貫)

區別	赤長種	黄太種
四月中旬播	一、九〇〇、〇〇〇	一、三五〇、〇〇〇
四月下旬播	一、〇七二、五〇〇	一、三六七、五〇〇
五月上旬播	六六六、二〇〇	八七一、二五〇
五月中旬播	二九二、五〇〇	五三七、五〇〇

右の成績によれば兩種共四月中に播種するを以て得策とす播種期の遅るゝに従つて減收の傾向を示せり

(二) 品種比較

當場圃場に適する品種を發見せんとして赤長種黄太種の二品種につき試験せるに二ヶ年平均に於て黄太種優良なる成績を挙げたり

八 野草草立に關する研究

(一) 無肥料野草地の刈取時期と翌年收量との關係

成績 (反當收量單位貫)

刈取時期	昭和二年		昭和三年	
	生草量	乾草量	生草量	乾草量
第一區七月上旬	二四七、五〇〇	一〇五、〇〇〇	二八五、〇〇〇	一〇一、二五〇
第二區八月上旬	一六四、五〇〇	八七、〇〇〇	二四二、五〇〇	九七、五〇〇
第三區九月上旬	二四七、五〇〇	一〇七、五〇〇	三〇二、五〇〇	一三五、〇〇〇
第四區十月上旬	二一七、五〇〇	一〇〇、〇〇〇	二七〇、〇〇〇	一五二、五〇〇
第五區十一月上旬	二三五、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	二七七、五〇〇	一五五、〇〇〇
第六區十二月上旬	一七五、〇〇〇	一二五、〇〇〇	一七五、〇〇〇	一〇七、五〇〇

(二) 施肥野草地の刈取時期と翌年收量との關係

施肥は反當堆肥三百貫を昭和三年二月に撒布せり

成績 (反當收量單位貫)

刈取時期	昭和二年		昭和三年	
	生草量	乾草量	生草量	乾草量
第一區七月上旬	二三七、五〇〇	九七、五〇〇	三三七、五〇〇	一二七、五〇〇

飼料栽培成績要報

區分	生草	乾草	量
第二區八月上旬	二二八、七五〇	二六二、五〇〇	一〇六、二五〇
第三區九月上旬	二四五、〇〇〇	三九二、二五〇	一五六、二五〇
第四區十月上旬	二二七、五〇〇	二八〇、〇〇〇	一六五、〇〇〇
第五區十一月上旬	一六二、五〇〇	二八七、五〇〇	一六七、五〇〇
第六區十二月上旬	一五〇、〇〇〇	二三二、五〇〇	一四〇、〇〇〇

(三) 要約

右試験地の野草は主としてチガヤに少量の萩を混ぜるものにして昭和二年二月各區一齊に火入を行ひ草立に對して同様ならしめて着手せるものなり而して以上の結果より昭和三年の收量を前年收量と比較し刈取時期が翌年の收量に及ぼす影響を明かならしむれば左表及び左圖の如し

前年收量との比較表
無肥料區

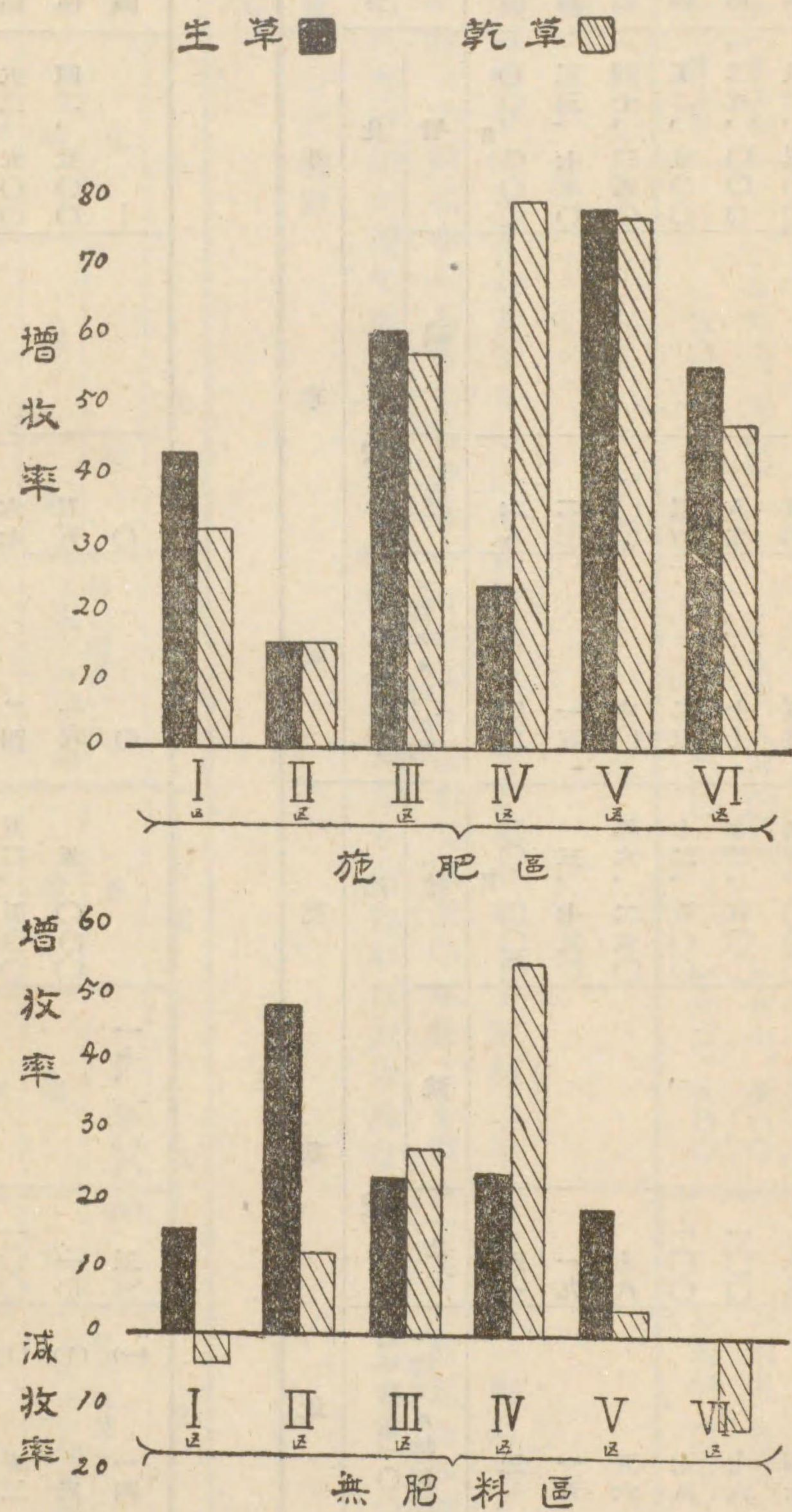
區分	生草	乾草	量
第一區	三七、五〇〇	三、七五〇	一九七
第二區	七八、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一四一

區分	生草	乾草	量
第三區	五五、〇〇〇	二七、五〇〇	二二
第四區	五二、五〇〇	五二、五〇〇	二四
第五區	四二、五〇〇	五、〇〇〇	一八
第六區		一七、五〇〇	〇

施肥區

區分	生草	乾草	量
第一區	一〇〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	四二
第二區	三三、七五〇	一三、七五〇	一五
第三區	一四七、二五〇	五六、二五〇	六〇
第四區	五二、五〇〇	七二、五〇〇	二三
第五區	一二五、〇〇〇	七二、五〇〇	七七
第六區	八二、五〇〇	四五、〇〇〇	五五

前年収量トノ比較圖



以上昭和二年に於ける刈取時期が翌三年の収量に及ぼせる影響につき考察するに
 (イ) 無肥料野草地に於ては生草収量は八月上旬刈取りたるもの増収率最も大にして刈取時期遅
 る、に従つて漸次小なり

乾草収量は十月上旬刈取のもの増収率最も大にして刈取時期早きもの程小なり
 (ロ) 施肥野草地に於ては生草刈量は十月上旬刈取のもの増収率大にして乾草収量は十月上旬
 刈取のもの増収率大なり
 (ハ) 翌年の野乾草の収量のみ就て考察すれば十月上旬刈取りたるもの増収率最も大なり
 (ニ) 僅少の施肥により野草の収量は著しく増加することを認めらる

九 青刈用燕麥並ザードウキツケンの
 混播量に就て

耕種梗概	
播種期	十一月中旬
栽培距離	畦巾二尺 條播
刈取期	六月下旬
反當肥料	堆肥三百貫 過磷酸石灰五貫 米糠五貫
施肥法	元肥
飼料栽培成績要報	

飼料栽培成績要報

一區七坪

供試作物 ザードウキツケン、燕麥（リゴ）
 混播量（反當用量單位合）

作物名	第一區	第二區	第三區	第四區	第五區	第六區	第七區
燕	一〇、	一五、	二〇、	二五、	三〇、	三五、	四〇、
ザードウキツケン	二〇、	二〇、	二〇、	二〇、	二〇、	二〇、	二〇、

成績別 續（反當收量單位貫）

區	第一區	第二區	第三區	第四區	第五區	第六區	第七區
燕	三三九	三七三	四一二	三六〇	四二〇	四六三	三八六
麥	一五四	二七四	二七九	三六九	四〇七	三六〇	四二〇
計	四九三	六四七	六九一	七二九	八二七	八二三	八〇六

右の成績によれば第五區最も多收なりき

一〇ルーサン栽培試験

ルーサンの栽培に當り肥料其他栽培方法を合理的に行ふと雖良好なる成績を得られざる場合あり
 即左に元中國支場に於て施行したる試験を記述し其の参考に供すべし

試験區	記	事
第一區	無肥料區、（對照區）	
第二區	肥料加用區、（反當）推肥三〇〇貫 過燐酸石灰六貫 木灰九貫	
第三區	石灰一〇貫	
第四區	根瘤菌加用區、千葉本場ルーサン栽培地土壤加用 肥料及根瘤菌加用區、第二區及第三區と等量の肥料並土壤加用	

播種期 大正八年十月二日
 播種量 反當五斤
 收穫期 大正九年七月二日
 收穫法 撒播

試驗區 開花始 收穫期莖長 反當收量 備考
 第一區 六月二十九日 一四寸 六〇貫 開花僅三四輪にして結實せず
 飼料栽培成績要報 一九

飼料栽培成績要報

開花僅五六輪にして結實せず

第二區	六、二二	一八	一六二
第三區	六、一八	二三	一九八
第四區	六、一五	二九	四七四

各區共發芽は十月七日にして發芽率は九五%なりき植物幼小なる間は其の生育状態は各區各れも一見同様なるやの觀ありしも莖長二寸位の時代より早くも第三區第四區に於ては根瘤菌着生擴大し行くを認めらるるも第一區及第二區は全く之を欠如せり
成長するに従つて第一區及第二區は葉色淡く成育劣等なるを示し第四區最も繁茂し收量最も多きを示せり之に依つて看れば共生根瘤菌を欠如せる地方にありてはルーサンの栽培には他の土壤より根瘤菌を移植すること肝要にして又根瘤菌を有する地方にありても一層成績を良好ならしむるには施肥に對して充分注意を必要とす

一一 青刈大豆の栽培に就て

(一) 畦幅と收量との關係

耕種概	五月中旬
播種期	八升
反當播種量	畦巾一尺、一尺五寸、二尺、條播
栽培距離	

收穫期	八月上旬
反當肥料	堆肥百五十貫 木灰十貫
施肥法	元肥
面積	一區十坪
供試品種	青刈大豆
成績	續(反當收量單位貫)
畦巾	反當收量
一尺	四二二、四〇〇
一尺五寸	四四〇、一〇〇
二尺	三五一、〇〇〇

右の成績によれば一尺五寸區最も多收にして畦巾廣くなるに従つて減收の傾向あり

(二) 種播量に就て

青刈用として適當なる播種量を知らんが爲反當播種量三升區、四升區、五升區、六升區、七升區、八升區、九升區、一斗區の八區を設け試験したる結果八升區最も良好なる成績を示せり

一二 當場に於ける飼料作物栽培表

飼料栽培成績要報

メドウ、フェスキュー	同	四尺	同
トール、オートグラッス	五月下旬	四尺三寸	同
ペレニアル、ライグラッス	六月中旬	三尺六寸	同
エロー、オートグラッス	六月上旬	三尺	同
ル	五月下旬	三尺	同
レット、クロバ	同	二尺八寸	同
アルサイク、クロバ	六月中旬	二尺五寸	同
見本的栽培のもの			
オインレットス、ブROOM、グラッス	六月上旬	二尺七寸	生育良好
スキートセンテッド、バーナルグラッス	五月下旬	二尺三寸	同
レツド、トツプ	七月上旬	二尺八寸	同
メドウ、ソフト、グラッス	五月下旬	二尺三寸	同
ノツヂング、フェスキュー	同	二尺九寸	同
スレンジー、フェスキュー	同	一尺七寸	同
シープス、フェスキュー	六月上旬	二尺	同
ハーブ、フェスキュー	同	二尺三寸	同
ミドリ、フェスキュー	六月下旬	二尺	同
ホワイ、ト、クロバ	五月下旬	一尺	同

昭和四年七月十日印刷
昭和四年七月十二日發行

農林省 畜産試験場

(千葉縣千葉郡都村)

東京市赤坂區溜池町二番地

印刷者 織田正誠

東京市赤坂區溜池町二番地

印刷所 株式會社 太洋堂

電話 青山三九六七番

579
410

